

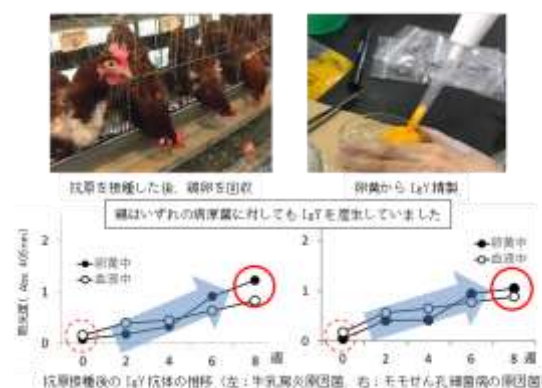
農畜産物の病気予防に鶏卵抗体（IgY）利用の可能性を調査

採卵鶏に抗原（無毒化した病原菌）を接種すると、体内に作られた「抗体」が卵黄に取り込まれ、卵から病原菌に対抗できる抗体が入手できます。この特徴を活かして、ヒトや魚の病気予防にIgYの利用が始まっています。

今年度、当センターでは、府内で問題となっている牛乳房炎^{※1}やモモせん孔細菌病^{※2}の予防にIgYが利用できるかについて調査しており、8月から11月にかけて鶏に牛やモモの病原菌を接種し、回収した鶏卵および血清中の抗体量を調べたところ、いずれの病原菌に対するIgYも作ることが確認できました。

今後は、このIgYが病原菌の増殖を抑えるかどうか検証します。

- ※1 牛乳房炎:乳房の乳腺機能の低下による乳量の減少や廃用の原因となり、経済的な損失が非常に大きい
- ※2 モモせん孔細菌病:葉では穴が空き早期落葉の恐れがある。果実では表面に変色を伴う病斑を作り、商品価値が著しく低下する



畜産センター

「肉用牛経営向上技術発表会」を開催

会場では、肉用牛経営の一層の向上を目指し、和牛の改良や高品質牛肉生産技術の定着を図るため、毎年「肉用牛経営向上技術発表会」を開催しています。

今年度は11月14日に、『魅力ある京都産和牛子牛を増やそう！』をテーマに開催し、和牛農家を中心に53名の参加がありました。(公社)京都府畜産振興協会などの関係団体の協力を得て、肉用牛の先進地である鹿児島県から、そお鹿児島農業協同組合の春田孝洋氏を講師に迎え、「鹿児島県の肉用牛情勢とこれからの和牛繁殖経営」と題し、安定した経営について幅広い視点から講演を頂きました。

また、会場からは「会場における和牛子牛の疾病予防対策の取組」について発

表し、意見交換をしました。

参加者からは、「鹿児島県の取組を参考に和牛子牛を増やしたい」「疾病による事故を減らしていきたい」など意欲的な発言が多く見られ、有意義な発表会となりました。



春田孝洋氏の講演に熱心に質問する参加者
畜産センター礎高原牧場